様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １６ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０８３０

研究課題名（和文）出土文献に基づく左伝学の再構築

研究課題名（英文）A RECONSTRUCTION OF ZUOZHUAN STUDY BASED ON EXCAVATED TEXTS

研究代表者
吉本　道雅（YOSHIMOTO, Michimasa）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：７０２０１０６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：戦国秦漢諸文献の春秋史に関わる記述につき、その内容に加えて使用言語を分析することで、それらにおける『左伝』受容の具体像を解明した。『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国竹簡』などの出土文献を素材に「前4世紀の言語」に特徴的な語彙・句法を摘出し、前4世紀の『左伝』と前3世紀以降の戦国秦漢文献の使用言語比較の参照に供した。

研究成果の概要（英文）：This research project analyzes use language, as well as contents, of descriptions on history of the Spring and Autumn period in literatures of the Warring States, Qin, and Han periods, and clears concrete image of their acceptance of the Zuozhuan, and picks out vocabularies and grammatical characteristics of “the language of the 4th century B.C.” from excavated texts such as the Shanghai Museum bamboo slips and the Qinghua bamboo slips for reference of comparison use languages between the Zuozhuan of the 4th century B.C. and literatures of the Warring States, Qin, and Han periods after the 3rd century B.C.

研究分野：人文学

キーワード：左伝　国語　郭店楚簡　上博楚簡　清華簡　北大簡

１．研究開始当初の背景

研究代表者は 1980 年代より、先秦史および先秦期を扱った資料の研究を進め、『中国先秦史の研究』（2005）を上梓した。本研究課題は、地域・時代を中国古代に戻し、出土文献に基づく知見を梃子に、戦国秦漢諸文献における『左伝』受容の実態を解明するものである。

『左伝』研究史において、本研究課題に大きく関係するものが、 Bernhard Karlgren "*On the Authenticity and Nature of the Tso Chuan*", Göteborg, 1926.（小野忍訳『左伝真偽考』、1939）である。同書は、『左伝』の使用言語が『論語』『孟子』などの「魯語」や『呂氏春秋』『戦国策』『荀子』『韓非子』などの「前 3 世紀の標準文語」とは異なった、均質な文法を有することを確認し、前 300 年以前の成書とした。鎌田正『左伝の成立とその展開』（1963）はこれを踏襲し、『左伝』『史記』の対応部分を比較して、『史記』における『左伝』の平易化を確認し、清末公羊学派以来の劉歆偽作説に対する有力な反証とした。

研究代表者は、「春秋載書考」（1985）・「晋国出土載書考」（1985）において侯馬載書・温縣載書と『左伝』所見の載書の比較を行い、ついで、Karlgren・鎌田の方法を全面的に展開し、「史記述春秋經伝小考」（1988）・「国語小考」（1989）・「春秋事語考」（1990）・「左氏探源序説」（1991）・「檀弓考」（1992）・「曲禮考」（1995）・「左伝成書考」（2002）・「春秋三伝小考」（2003）・「『左伝』と西周史」（2007）などにおいて、『左伝』に先行する春秋学の状況、『左伝』の原資料・成書年代、戦国秦漢文献における『左伝』の受容といった問題を検討した。これらの研究は、「春秋載書考」「晋国出土載書考」が侯馬載書（『侯馬盟書』、1976）・温縣載書（『考古』1983-3）、「春秋事語考」が馬王堆漢墓帛書『春秋事語』(『馬王堆漢墓帛書［參］』、1983）を扱うことを除けば、基本的に伝世文献を扱う。これは『左伝』に関連する出土文字資料の貧困に由来する。

日本における殷・西周史および戦国秦漢史研究は、1970 年代以降の出土文字資料の増加により飛躍的な展開を遂げた。思想史研究においても、『郭店楚墓竹簡』（1998）が公刊され、郭店１号楚墓が考古学的に「戦国中期偏晩」、前 300 年前後に編年されることから、郭店楚簡に類似する伝世文献が前 4 世紀に遡る可能性が一般的な認知を得るようになった。2001 年には『上海博物館蔵戦国楚墓竹簡』が、2010 年には『清華大学蔵戦国竹簡』が逐次刊行されるようになり、戦国楚簡研究は、今日の中国古代思想研究史において最も活況を呈している。研究代表者も「窮達以時考」（2005）・「緇衣小考」（2005）を公刊した。これら戦国楚簡においても『左伝』に関連するものはなお乏しかったが、そうした状況は昨年末に一変した。

2011 年 12 月、『浙江大学蔵戦国楚簡』『清華大学蔵戦国竹簡［貳］』が公刊された。前者には『左伝』襄公九年・十年が、後者には、『左伝』との対応部分を含む、西周から戦国前期を扱った『繫年』が収録される。『左伝』研究史上の画期というべき新資料の出現である。浙大簡『左伝』は、報告書の前 340 年という主張に従うにしても、『左伝』を前 365-前 364 年成書とする研究代表者の年代観（「左伝成書考」）に抵触せず、伝世本との本質的な異同も認められない。むしろ戦国秦漢諸文献における『左伝』受容を検討してきた研究代表者には、『左伝』受容の最初期のありかたを示す材料として『繫年』が注目される。

問題とすべきは、『繫年』の成書年代である。清華簡残片に対するＡＭＳ炭素 14 年代測定によれば、年輪較正後の年代は

305±30BC と判定され、従って、簡に抄写された文献の成書は、前 305 年以前に推定することが自然である。報告書は、第 23 章に楚悼王が見えることから、楚肅王（前 380-前 370）ないし宣王（前 369-前 340）時期の成書と推定する。しかしながら、楚悼王が見えることは、とりあえずは成書年代の上限を示すものに過ぎない。一体、先秦諸文献の成書年代推定には、(1)記述された事件の絶対年代、(2)他の文献との引用関係の確認に基づく相対的先後関係、(3)語彙・句法の時代性などが手がかりとなる。報告書の成書年代推定は、わずかに(1)に拠るものに過ぎない。(2)について、報告書は、『尚書』『春秋經』『左伝』『国語』『史記』と『繫年』の記述を比較し、その異同を指摘してはいるが、それ以上の検討は行っていない。

このような批判的見地から、研究代表者は(2)(3)の作業を行い、その他の所見を加えて「清華簡繫年考」（2013）を脱稿したが、『繫年』の語彙・句法の戦国秦漢文献における使用状況を確認した結果、きわめて重要な所見を得た。すなわち、『繫年』には『左伝』にほぼ専用される語彙・句法が多数見えるが、これら『左伝』専用語は、『国語』など戦国後期、前３世紀の諸文献には、その一部のみがわずかに見えるという事実である。管見によれば、『繫年』の成書年代は前 340 年前後に推定されるが、使用言語において『繫年』が『国語』など戦国後期文献より『左伝』に近いという事実は、前 4 世紀と前 3 世紀という時代差を反映しているのである。この所見は、現時点ではもっぱら伝世文献に依存したものに過ぎないが、前 4 世紀以前の成書が推定される『郭店』『上博』『清華』などの語彙・句法を全面的に参照することによって、より確実な議論が期待できる。今一つ獲得した所見は、『左伝』『繫年』に共有される語彙・句法のあるものが、伝世戦国後期文献においては『竹書紀年』『公羊』『穀梁』『国語』あるいは『呂氏春秋』『韓非子』の春秋史の記述にも往々にして見えることである。この事実は、これらにおける『左伝』の受容を反映する。『国語』については、かつて「国語小考」（1989）において『左伝』との比較を行ったが、『左伝』『国語』の対応部分に限られた作業であった。『繫年』の使用言語に対する全面的な分析から獲得された豊富な所見に鑑みれば、伝世文献において『左伝』との対応部分が最大で、『繫年』に比べて膨大な分量を要する『国語』について『繫年』と同様の作業を施せば、前３世紀における『左伝』受容の基本的なありかたが解明されようし、前４世紀の出土文献を参照することで、『左伝』引用部分と同程度に遡る、いわば『国語』に保存された前４世紀以前の文献の発見も期待できる。その他、戦国後期から前漢前期の成書が推定される伝世・出土文献はさほどの分量でもなく、『国語』に対すると同様の作業を施すことはたやすい。以上の作業によって、『左伝』の受容および春秋史に対する歴史認識の推移を戦国中期～前漢前期、前 4 世紀から前 2 世紀の時代幅において動態的に把握することが可能となり、さらにこの過程を逆にたどることによって、『左伝』に保存された春秋期の同時代資料への到達が期待できる。

このように、本研究課題は、春秋学ないし中国思想史の枠組みに蹋蹐された従来的な『左伝』研究を克服し、資料学的側面から中国古代史研究に一般的かつ深甚な貢献をなしうる左伝学の再構築を志向するものである。

２．研究の目的

戦国秦漢諸文献の春秋史に関わる記述につき、その内容に加えて使用言語を分析することで、それらにおける『左伝』受容の具体像を解明する。使用言語の分析

には、『郭店楚簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国楚帛書』などの出土文献を活用する。以上の作業によって、『左伝』の受容および春秋史に対する歴史認識の推移を戦国中期～前漢前期、前 4 世紀から前 2 世紀の時代幅において動態的に把握することが可能となり、さらにこの過程を逆にたどることによって、『左伝』に保存された春秋期の同時代資料への到達が期待できる。このように、本研究課題は、春秋学ないし中国思想史の枠組みに踢躓された従来的な『左伝』研究を克服し、資料学的側面から中国古代史研究に一般的かつ深甚な貢献をなしうる左伝学の再構築を志向するものである。

３．研究の方法

（１）『郭店楚簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国竹簡』の通仮字・古今字・異体字ないし訛字を外して本字・今字・正字のみを用いた電子テキストを作成する。これに並行して、通仮字を見出しとした通仮字・本字置換表を作成する。

（２）『国語』、『竹書紀年』『公羊』『穀梁』など『春秋經』および『左伝』に類似した編年体史書、『呂氏春秋』『韓非子』『新書』『韓詩外伝』の春秋史関係の記述、馬王堆卷墓帛書『春秋事語』・阜陽漢簡『春秋事語』・北大漢簡『周訓』など戦国後期から前漢前期の成書が推定される『国語』に類似した出土文献を素材に、『左伝』との内容および使用言語の比較を行う。

４．研究成果

【平成 25 年度】

（１）『郭店楚簡』・『上海博物館蔵戦国楚竹書』1～9・『清華大学蔵戦国竹簡』1～2 を対象に、通仮字・古今字・異体字ないし訛字を外して本字・今字・正字のみを用いた「本字テキスト」を作成し、それに加えて、通仮字を見出しとした通仮字・本字置換表を作成した。さらに『上海博物館蔵戦国楚竹書』のうち、『国語』に類似した諸篇については、語彙の包括的分析を行った。

（２）『国語』の包括的分析を行い、その研究成果の一部を「国語成書考」として公刊した。

【平成 26 年度】

（１）『清華大学蔵戦国竹簡』3 を対象に、通仮字・古今字・異体字ないし訛字を外して本字・今字・正字のみを用いた「本字テキスト」を作成し、それに加えて、通仮字を見出しとした通仮字・本字置換表を作成した。

（２）『左伝』の定量的分析を進め、その研究成果の一部を、「『左伝』と春秋史」として公刊した。

（３）Lothar von Falkenhausen UCLA 教授の紹介にて、平成 26 年 11 月 12 日～12 月 17 日に沈載勲（Jae-hoon SHIM ）檀國大学校教授を招聘し、清華簡『繫年』に関する共同研究を行った。

【平成 27 年度】

（１）『左伝』の定量的分析を進め、研究成果の一部を「『左伝』の予言」として公刊した。

（２）左伝学の展開に関わる研究を進め、研究成果の一部を「春秋釈例世族譜の戦国紀年」として公刊した。

（３）報告書の作成に従事した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 吉本道雅「『左伝』の予言」、査読無、『京都大学文学部研究紀要』55、1-60 頁、2016 年。

② 吉本道雅「『左伝』と春秋史」、査読無、『京都大学文学部研究紀要』54、1-76

頁、2015 年。
③　吉本道雅「国語成書考」、査読無、『京都大学文学部研究紀要』53、1-43 頁、2014 年。
④　吉本道雅（翻訳）、査読有、Lothar von Falkenhausen「江村治樹著　春秋戦国時代青銅貨幣の生成と展開」、『東洋史研究』72-2、139-148 頁、2013 年。

〔学会発表〕（計 2 件）
①　吉本道雅「『左伝』と春秋史」、公開シンポジウム、京都大学文学部、2014 年 12 月 18 日。
②　吉本道雅「読“満族文学源流及其発展”札記　以《紅羅女》的成立年代為中心」、近世東亜与満洲族文化、高麗大学校民族文化研究院満洲学中心、2013 年 5 月 3 日。

〔図書〕（計３件）
①　吉本道雅（分担執筆）『中国史　上　古代～中世』、19-58 頁、昭和堂、2016 年。
②　吉本道雅（共著）『中国古代史論叢　第八集』、1-23 頁、中国古代史論叢編纂委員会、2015 年。
③　愛新覚羅烏拉熙春・吉本道雅（共著）『大中央胡里只契丹国　遙輦氏発祥地の点描』、194-254 頁、松香堂、2015 年。

６．研究組織
(1)研究代表者
吉本　道雅（YOSHIMOTO　Michimasa）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：７０２０１０６９